

近代の村と 海印寺村役場文書

【展示期間】
4月4日（火）
～7月2日（日）

海印寺村役場文書は、長岡京市の近代化を物語るまとまった文書群として代表的なものの一つです。近代の村の変遷をたどりながら、明治の行政文書を紹介しましょう。

明治前期の文書群

昭和61年（1986年）、改築のため常光寺の納屋を取り壊したさい、いくつかの竹箆に詰められた古文書が発見されました。常光寺は大正12年（1923）まで海印寺村役場がおかれていたところで、村役場新築移転のさい古文書の一部が偶然に残されたものと思われます。

この中には、区戸長制下、京都府から奥海印寺村へ出された布令の綴や写帳のほか、地租改正の関係帳簿や丈量図、社倉積立金、学校費関係帳簿などの地域行政に関わるものが残っており、これらは村の近代化のようすが具体的にわかる資料として貴重なものです。

3カ村期の文書

明治21年（1888）の市制町村制の公布により、長岡京市域では新神足村・海印寺村・乙訓村の新しい村が誕生しました。常光寺で発見された海印寺村役場文書は、主に明治34年と明治36年から明治38年までの4年分が残っています。昭和24年（1949）、新神足村・海印寺村・乙訓村の3カ村が合併して長岡町となりますが、合併時の資料はもちろん、長岡町に引き継がれた3カ村村役場の文書は少なく、徐々に廃棄されていったものと思われます。

かろうじて残った、常光寺発見の海印寺村役所文書4カ年の表紙には、文書の保存年限や番号が朱書きされており、行政文書らしい体裁をみることができます。保存年限は「永年」・「10年」・「5年」・「3年」の4種類です。

永年文書には、京都府知事や乙訓郡長との往復文書である「官庁令達綴」・「上司進達綴」が、また10年保存文書には、「人民願届綴」・「郡組合事務一件綴」・「会計に係る往復綴」が、5年保存には「日誌」、3年保存には「雑綴」などがあります。



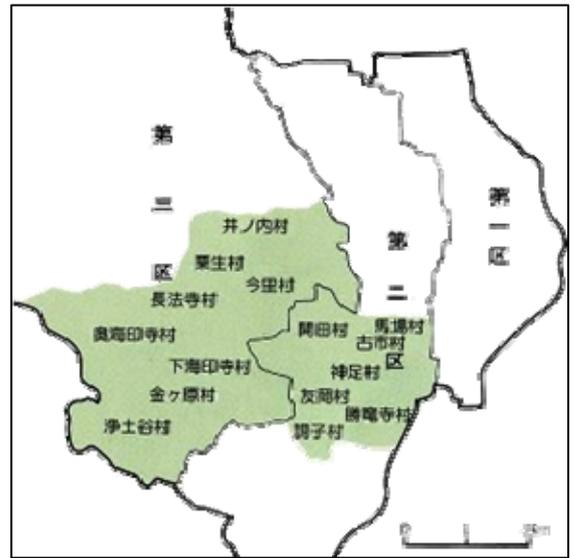
海印寺村役場日誌からみる

「日露戦争」

明治37年（1904）は日露戦争が勃発した年で、海印寺村の日誌には、その時のようすがくわしく記載されています。召集令状の手渡し、出征兵士の送迎、兵士が亡くなった時の村葬の手配、軍隊通過の歓迎、出征留守家族の慰問など、銃後の村のようすと役場吏員の奮闘ぶりがわかります。



連合戸長役場制下の乙訓郡(明治 17 年)



区戸長制下の乙訓郡(明治 5 年)



町村制下の乙訓郡(明治 22 年)



区戸長制下の乙訓郡(明治 6 年)

乙訓郡の行政区画の変遷

区戸長制から町村制下にいたる複雑な行政区画の変遷に伴い、各村ではそれに対応した煩雑な行政事務を行わねばなりません。

(アミの部分現在の長岡京石城)



組戸長制下の乙訓郡(明治 12 年)